



No.42

[平成 24 年 10 月 29 日]

岡山県総合教育センター

〒716-1241

加賀郡吉備中央町吉川 7545-11

TEL(代) (0866)56-9101

(特別支援教育部) (0866)56-9106

〈特別支援教育部相談専用電話〉

TEL (0866)56-9117

<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

学習指導案は誰のために書くのか

－ 学習指導案は自己の専門性向上のために －

特別支援学校に勤めているときこんな会話がありました。それは、研究授業をだれがするのかを学年で話し合っていた時のことです。「研究授業，誰かしてもらえないかな」と学年主任が投げかけると，その言葉に雰囲気が一瞬にしてどんより曇ってしまいました。そして，先生方から出てくる発言も「指導案を書かないといけませんよね」「この時期忙しいからな」など，研究授業や学習指導案作成に対して消極的なものばかりでした。そのような中で，ある30代の先生が，研究授業を受けると「指導案に力を入れることはないよ。力を入れて書いてもそのとおりになることはないんだから」とか「授業は指導案の善し悪しじゃなくて，実際の授業で勝負なんだから」などと，学習指導案を書くことを否定するような発言が続けざまにありました。

このような会話は日常よく聞くものでもあります。それでは，私たちは，なぜ学習指導案を書くのでしょうか？そして，誰のために学習指導案を書くのでしょうか。私の経験をエピソードという形で取り上げて，このことについて今回は考えていくことにします。

エピソード1 「学習指導案は自分の成長のために書きなさい」

私はある養護学校で新採用となり，障害の重い子どもたちの教育に携わることになりました。養護学校義務化の数年後ということで，まだまだ教育課程や指導内容が十分に確立されておらず，毎日が試行錯誤の連続でした。そのような背景の中で，ベテランの教師も新採用の教師も教師経験に差はあるものの新しい教育を作っていくという気概に満ち，教員相互で時には激しい議論を，時にはお互いを支え合いながら，指導内容表や指導段階表を作ったことが懐かしく思い出されます。

その当時の授業は，病棟の一室を借りて集団で授業を行ったり，障害の状況によっては，ベッドサイドで個別に授業を行ったりしていました。集団の授業では，複数の教員で指導をしていたので，分からないことがあれば，その都度，先輩方に話を聞いたり，直接的な対応を教えてもらったりしながら，安心して授業に取り組むことができました。しかし，ベッドサイドでの個別の授業は，一対一の指導となり，指導技術面で未熟な私は常に不安を抱きながら子どもに関わっていました。そんなある日，ひとりの先輩の

先生に「子どもへの対応の仕方や授業展開，教材について自信が持てないので，一度授業を見て欲しい」とお願いをしました。その先輩は，快く授業参観を引き受けてくれましたが，ひとつ条件として「学習指導案を書くように」と言われました。その時は，新採用の研究授業を行う前の時期だったので，学習指導案の基本もまったく理解できておらず，本当に書くことができるのか，不安と焦りばかりが募っていました。当時の日記には，「不安だから授業を見て欲しいと言っただけなのに大変なことになった」「学習指導案を書いてもそのとおりにいくはずもない。それなのになぜ学習指導案を書くことが前提になるんだ」などと，その時の正直な気持ちを書きなぐっていました。しかし，学習指導案を書くことが授業参観の条件だったので，学校にストックされていた学習指導案を参考にしながら，担当の子どもの実態から単元目標や，指導内容，指導に対する自分の考え方をまとめてきました。子どもの実態は，昨年までの指導の記録をすべて読み，指導内容は，当時の養護・訓練（現在の自立活動）の解説を何度も何度も読み返していきました。具体的な指導法については，他に参考になるものがあまりなかったもので，病棟所属の理学療法士さんに相談し，拘縮の予防や運動機能の向上に関する指導を行う上でのポイントについて助言をもらいました。今思えば本当に未熟なものでしたが，初めての学習指導案を5月の終わりまでに書き終え，先輩の先生に持ってきました。先輩の先生は「よく一人で書き上げたな」と私を褒めてくれました。そして，翌日には，疑問に思うことをピックアップして学習指導案に赤を丁寧に入れてくれました。その赤をじっくり読み返し，また自分で書き換えて学習指導案を提出をすると，「よし，授業を見るから」と言って，わざわざ授業変更をして授業を参観してくれました。授業後は，時間を取って授業改善のポイントをひとつひとつ丁寧に教えてくれました。その先輩が二人だけの反省会で言ってくれた言葉は，「学習指導案は人のために書くんじゃない。自分の成長のために書くんだけ。自分のためにと思えば，いろんな努力を主体的にする。そして，悩んだことは必ず子どもの成長・発達につながる。これからは，悩みながら学習指導案を書きなさい」でした。

今思えば当時は大変苦しい思いをしました，すばらしい先輩を介して，学習指導案を書くことの意義を新採用の時に学ばせてもらったことは，本当にありがたかったと思っています。

エピソード2 「学習指導案を書くことは授業づくりそのものなんだよ」

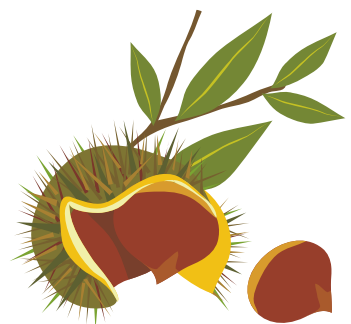
2校目は，非常に研究熱心な知的障害の養護学校に転勤をしました。この学校では，転勤して2年目に必ず学習指導案を書いて研究授業をするということが，学校の暗黙の了解となっていました。当時，中学部2年生を担当し，生活単元学習に強い興味・関心を持ちながらも日々悪戦苦闘をしていたので，研究授業では「生活単元学習」を取り上げ学習指導案を書いていくことにしました。その学校は，学習指導案の一応の形式はありましたが，自分の思いを自由に書いても構わないということでしたので，私は数ページを使って単元設定の理由を書きました。たくさん書けばよいということではありませんが，自分の考えを主張するという意味において，この枠にとらわれず，自由に



書いてもよいという申し合わせは大変ありがたいものでした。しかし、この学校の先生たちは自由に書くということ、簡単に書くということに置き換えたりはしませんでした。ですから、略案程度のものを書いて出す方は誰一人いませんでした。それは、エピソード1でも書いたように、ひとりひとりが、学習指導案を書くことを自己の成長に生かしていくという強い意識を持っていたからだと思います。

学習指導案を書くことについては、私は新採用の時から、真摯に取り組んできたつもりでしたが、まだまだ学習指導案の中に授業づくりの過程や自分の考えを的確に反映させることができず、学習指導案作成の時には必ず先輩から指導助言をもらうようにしていました。この時の学習指導案も、当時の研究主任をされていた先生に見てもらうことにしました。この研究主任の先生は、非常に専門性が高く論理的に、しかも具体的な子どもたちの事実を基にしながら話をしてくれる方でした。当然、この先生は私の申し出を快く引き受けてくれ、学習指導案づくりに関わってくれることになりました。

研究授業で取り上げる「生活単元学習」については、当時、誰よりも学習しよく知っているという自負と、学習指導案については自分なりに書き続けたという自信があり、授業づくりの弱点が学習指導案の中に垣間見られたといいながらも、大きな修正はなしで返ってくると思っていました。学習指導案を書き上げ、意気揚々と学習指導案を持って行くと、その先生は「どこまで見ればいい？」と聞いてきました。変なこと聞くなと思いながら、聞き返してみると「誤字脱字程度を見るのか、書きぶりをみるのか、単元構成、内容レベルまで含めてみるのか」と言われました。そこで、即座に「単元構成、内容を含めすべて見てください」とお願いをしました。何日か経ったある日、「放課後時間があったら話をしよう」と声をかけてくれました。授業に関して、どのような意見がもらえるか期待して部屋に行くと、差し出された学習指導案を見て愕然としました。学習指導案は、みごとに真っ赤でした。部分が真っ赤ということではなく、学習指導案全体が真っ赤になっていました。その学習指導案を見て、「どこが、どうおかしかったのでしょうか」と尋ねると、「生活単元学習の学習指導案としてはよく書けていると思うし、授業として成立する」と言ってくれました。それでは、なぜと思っていると、「書いていることに曖昧さがあり、その曖昧さは授業の中に必ず出る」と言って、学習指導案を最初から指で押さえながら、赤の部分に関してひとつひとつ私に解釈を求めながら、書かれていることについての不明確さを丁寧に整理をしてくれるとともに、価値付けもしてくれました。言われることはもっともでしたが、さすがにその日は自分の力のなさに落ち込んでしまいました。しかし、次の日には気持ちを立て直し学習指導案の修正を始め、再度学習指導案を書き直しては持って行って助言をもらい、また修正をして学習指導案を持って行くということを4～5回続けました。その過程の中で、学習指導案の赤が少しずつ減り、最後には「ここまで具体化できたら授業でも大丈夫だよ」と言ってくれました。その時の嬉しさはいまでも覚えています。その先生に、「先生はなぜここまで学習指導案づくりに付き合ってくれるのですか」と尋ねてみました。そう



すると、「この過程は単なる学習指導案づくりではなく、授業づくりそのものだと思っ
ているし、こうやってやりとりをしながら授業を作っていくことが楽しいことなんだと」さら
っと言われました。その言葉を聞きながら、「学習指導案づくりは授業づくりそのもので
ある」ということや「授業づくりは仲間と共に楽しむもの」であることを実感しました。

この時から、「学習指導案づくりは授業づくりそのものである」ということを強く意識
し、学習指導案を授業づくりや授業改善の最大のツールとして考えるようになりました。

学習指導案を書くということは「書くように指示されたから」とか、「公開授業があ
るから仕方なしに」とかというように消極的なものではなく、自分の授業力を高めるため
の、あくまでも自分が主体のものであると考えます。学習指導案づくりは、自分の授業
力を高めるために楽しみながら行うものです。

学習指導案作成は自己の専門性向上のため

エピソード1，2 はあくまでも私が経験の中で実感したものです。他の先生方も私と
同じ価値を感じてくださいと言っているわけではありません。ただ、授業改善の主体は自
分自身であり、私たちは授業を通して、子どもたちの成長・発達に関わっているという
ことだけは忘れないようにして欲しいと思っています。誰々から言われたから、指示され
たから学習指導案を書くということでは自己の成長は期待できません。自己の授業をよ
り豊にという意味でもっと積極的に書いていくことが必要ではないのでしょうか。

だからといって単元設定の理由から本時案までフルの学習指導案を毎日書くことは
非現実的です。日頃から略案の作成を通して授業構成を考えたり、具体的な支援を考
えたりすることが大切です。日々の略案作成の積み上げを通して、初めてフルの学習
指導案を書いていくことができるのだと思います。そして、略案を含め学習指導案は、
自己の授業づくりや授業改善のためのツールで、自己の専門性の集大成でもあること
を忘れないように、日々自己研鑽を積み重ねていくことが大切だと考えています。

また、私自身さほど抵抗感なく学習指導案を書くことができたのは、新採用の時から
周りの多くの先輩たちが、学習指導案を書くことの意義を丁寧に教えてくれたからだ
と思っています。学習指導案は最終的にはひとりで書かなくてはなりません。しかし、書
いたものを多くの先生方に提示し意見をもらいながら修正していくことにより、授業そ
のものの質をあげていくことができます。その意味からすれば、学習指導案の作成は同
僚との協同作業といってもよいと思います。最後に、

学習指導案づくりは自己の専門性を高めるもの
学習指導案づくりは現時点での自己の専門性の集大成
学習指導案づくりは自己の主体から行われるもの

この3点をしっかり意識しながら学習指導案づくりに取り組んでみませんか。